

Vectorworks  
Design Pick Up

04

CADによって変わるもの。  
変わらないもの。



「日月潭風景管理处」 提供: 團紀彦建築設計事務所

**CADは建築の「何」と向かい合うのか。台湾の二つの国際コンペで一等を獲得。建築と地形、建築と地域文化との関係を読み解き、東京では日本橋室町再開発のマスターアーキテクトを務める團紀彦氏に話をうかがう。**

新しい有益な技術の登場は、常に人間社会に進化をもたらしてきました。しかしこうした新技術は、未来へ最短距離を直線的に推し進めるのではなく、それによって変わるものと変わらないものや、過去と未来の間を行き来しながら、時には遠回りして、次の時代を迎えてきたのだと思います。

CADの登場が建築設計のスタイルを大きく変えたのは間違いありません。「日月潭向山地区ビジターセンター」も、CADなしには実現できなかったと思う。コンピュータによる解析は、設計図書を手描きしていた時代には困難だった複雑な建築造形を可能にしました。メディアもそうした建築作品を華々しく採り上げ、多くの方は建築は進化したと感じたかもしれない。しかし私には、むしろ、CADの出現によって変わるところと、建築として根本的に変わらないところが明確になったように思えるのです。新しいテクノロジーと現状との兼ね合いを、個々人がどう捉えるか。あるいはどうバランスさせるか。その視点が求められているのではないのでしょうか。

ある時期、建築を学ぶ学生で、ドローイングを描けない人が目立つようになり、それは製図板がなくなった世代の大きな変化でした。手描きの線は、暫定的な線なのか確信がある線なのか、自信があるか否か。その時の自分自身の痕跡でもあります。それがCADの単純なラインになると、設計している自分の状況が見えづらくなる危惧を感じていました。しかし最近の学生は、再びドローイングの大切さに気づき始めた印象があります。こうしたバランスの中で、私たちは新しい時代を迎えられるのでしょうか。

コンピュータが当たり前になった世代では、建築の「機能」は「プログラム」という言葉に置き換えて語られることが増えています。プログラムという言葉には、一枚の薄い壁で二つの自律的な機能(プログラム)、管理区分に仕切ることができるイメージが私にはありました。しかし実際にはボーダーはそんなに単純なものではなく、例えば現実の都市や国家では、ボーダーで二者を切り離すことで見えなくなる文化や歴史がある。だから私はボーダーに興味があるのです。境界線上ではお互いの共通言語を見出さなくては対話できない。一本の道路を挟んで向かい合う街並みは、その境界線上で絶縁されるのではなく、人々の営みや文化、歴史や、それに導かれた意匠や建築言語と向かい合うことが求められます。

CADが画面上に描かれる一本のラインは、単純に二つの「プログラム」を分けるのではなく、そのボーダー上で起こる問題や対話、調和への想像力を喚起するものであってほしいと思います。



「栄町の音楽ホール」 撮影: 新建築写真部



團紀彦 (だん・のりひこ)

1956年 神奈川県生まれ。1979年 東京大学工学部建築学科卒業、1982年 同大学大学院修了、1984年 米国イェール大学建築学部大学院修了、1999年 日本建築学会賞業績賞、2003年 2002年度土木学会デザイン賞、「NEW TAIWAN by design」国際コンペ等(日月潭風景管理处及び修景計画)、2004年「NEW TAIWAN by design」国際コンペ等(台湾国際空港ターミナルI)、ARCASIA AWARDS 2007-2008 ゴールドメダル他受賞

Vectorworks®  
2011



**A&A** エーアンドエー株式会社 <http://www.aanda.co.jp/>